

21世紀の大阪緑化を考える 大阪緑地構想

大阪は、「緑の少ない町」と早くからいわれてきた。「杜の都」の仙台、「山紫水明」の京都など、わが国の大都市は昔から自然との結びつきを謳われたが、その中で大阪は「水の都」と形容された。しかし豊かな水を背景としながら、地勢的、歴史的要因により、大阪には事実、緑が少ない。また人工的な緑化を行うにも難しい地である。そこで今回、大林組プロジェクトチームは、二十一世紀へ向けての『大阪緑地構想』をテーマとして、現状を分析しつつ、未来の大阪にふさわしい緑化プランの立案に挑戦した。更にあわせて、大阪・長堀通りを選び、都心部における緑化のモデル・プランの提案を行った。

大林組プロジェクトチーム

一、大阪の緑をめぐる

大阪における緑化への関心

大阪において、緑の必要性が指摘されるようになったのは、いつ頃からのことであろうか。

大正十年と十五年に、大阪府は全国に先駆けて樹木被度の調査を実施している。戦前のわが国としてはきわめて進歩的な試みであり、当時すでに行政自体が、大阪の緑に関してかなりの問題意識を持っていたといえるだろう。

昭和の始めには、当時の大阪市長・関野氏¹が、主に災害、保健衛生対策として

大阪における緑色地帯の必要性を説き、「われわれの住居し得べき都市を建設する第一の条件はいかにして緑色地帯を保留し得るかである」(『都市政策の理論と実際』)と記述している。緑色地帯とは、公園、競技場、運動場、墓地、農耕地、樹林地などを意味しており、現代における都市緑化計画の考え方と相通じる要素も少なくない。

その後、昭和三十九年には、大阪府は未来一〇〇年にわたる『緑化宣言』を行った。これは大阪における緑の絶対量不足を解消するための、長期的展望であるといえる。

また昭和五十六年には大島靖市長が年

頭所感において、大阪の町のイメージチェンジを図るため、今後、花と緑などによる『美しい大阪』の町づくりを推進していく決意を述べられている。更に五十七年に大阪府が実施した『快適環境づくり』のアンケート調査結果を見ると、「快適な環境をつくるために行政対策で何をすべきか」との質問に対し、大阪市民は五〇・四割の高率で「緑化」を支持している。これは、大阪府域内の他地区と比較して、高い数値である。

このように大阪の、とりわけ市内における緑の必要性への関心は、数十年の間に行政から市民レベルへと急速な広がりを見せてきた。現在では、緑化は大阪市の

全体の総合的なテーマとして、推進されている。

大阪と他都市との比較

大阪の緑の現状を、他都市と比較してみた場合、どれほどの違いがあるのだろうか。表1は、大阪、東京、パリの三都市における緑の量を、多角的に比較したものである。公園について見ると、大阪は公園総面積こそ東京の三分の一以下だが、一人当たりの公園面積は二・六平方メートルと東京と同程度である。パリの場合、一人当たり一・三平方メートルと極端に少なく思われるが、ブローニュとヴァンセンヌの森(合計が一、八四〇ヘクタール)を加えると、一躍、

大阪と東京の緑地比較——人工衛星データによる都市緑地解析

大阪



東京



赤 市街地
緑 樹林地
黄 農地
淡青 河川水
ピンク 住宅地
黄緑 芝生・草地
黄土 工場地帯
濃青 海・水

(写真/財)リモート・センシング技術センター)

八・三平方メートルと大幅に増加する。ちなみに世界の大都市における一人当たりの公園面積は、以下のようになっている。

〈世界の大都市に見る一人当たりの公園面積〉	ニューヨーク	一九・二(平方メートル)
サンフランシスコ	三二・二	
ロンドン	三〇・四	
ローマ	一一・四	
ストックホルム	八〇・三	
ベルリン	二六・一	
レンブリグロード	一〇・一	
キャンペラ	七〇・五	
カイロ	一・一	
ジャカルタ	一・五	
バンコク	〇・四	

次に街路樹について見ると、大阪は街路樹本数こそ東京より少ないが、街路樹

指数では東京、パリを上回っている。また、街路樹密度では、東京の二倍の数値を示している。

このように公園と街路樹については東京よりむしろ優れているはずの大阪が、「緑の少ない町」とされるのは何故だろうか。

その理由の一つが、樹被率の項に見られる。東京では一、〇〇〇平方メートル以上の面積を占める樹林地が二・九割あるのに対し、大阪は六〇〇平方メートル以上の樹林地ですら、一・五割しか存在していない。つまり大阪には、公園と街路樹以外のまとまった状態での緑(地)が、極端に少ないのである。空撮写真によって比較すると、それは一目瞭然となる(前写真参照)。東京の都心部には、皇居、明治神宮などの公園面積には含まれない緑のまとまりが、いくつも見られる。ところが大阪の中心部では逆に、大阪城公園、天王寺公園、

観音堂などの公園以外には、広大な緑地が見られない。

この差異がそのまま、町の緑の印象を形成しているのである。

大阪に緑が少ない理由

地勢的に見ると現在の大阪は、西に海を望み、三方を北摂山系、生駒山系、金剛山系、和泉・葛城山系という豊かな自然に囲まれた大都市ということが出来る。しかし、上町台地を背骨に東西に広がっている大阪平野は、縄文時代には台地を除いて大半が海であった。上町台地の東側は河内湾を形成していたが古墳時代には湖になり、平安時代以降沖積平野となった。一方、現在の大阪市の中心地がある上町台地の西側も、海蝕による磯の拡大と河川のデルタの発達により低地となり、秀吉以降に人工的に盛土などで都市化された。そのため、土壌条件が悪く一般的にみて大きな樹木に適した土地とはいえない。

反対に、河内湾の時代から半島状に海に突き出た陸地が、現在の上町台地である。そこは早くから難波宮が営まれ、石山本願寺が建立され、大阪城が築造された地でもある。現在の大阪における数少ない高台である上町台地には、傾斜地が多く、そこには豊かな緑が繁っている。

これらのことから、地勢的要因の中ですりわけ土壌的要因と、大半が平坦地であるという地形的要因とが、大阪中心部における緑の少なさを決定付けている大きな理由の一つということになる。

次に歴史的に見ると、大阪は奈良、京

都に次ぐ古い都市である。織田信長が「大坂はおよそ日本一の境地なり」と看破したように、政治・経済・文化・交通のあらゆる面で、極めて優位な地理的条件を備えていた。人と物の集結が容易であり、とりわけ豊臣秀吉によって町づくりが実施されて以後の大阪は、急速に近代都市としての規模と内容を充実させていった。現在の市域の約三分の一は、人工的に埋立て、盛土された造成地であり、そこに流通を基盤とした大都市・大阪が繁栄してきた。

町づくりが行われた当初より、市街地では人口密度が高く、江戸時代で二割当たり三〇〇〇〜四〇〇〇人、工業都市化が進展した大正末期には、南区(二割当たり八三〇人)を筆頭に都心の区部では軒並み四〇〇人を超えていた。しかも住宅は低層であるため過密化し、空地が乏しく、緑のための余地は非常に少なかったのである。

また、一大商都として栄えた大阪は、町家が主流となり、広大な庭園を持つ武家屋敷は僅かであった。江戸時代の江戸と大阪を比較すると、江戸では武家地約六割、町人地約二割であるのに対し、大阪は武家地約二割、町人地約六割といわれている。その影響は現在でも残り、東京三区内の第一種住宅専用地域は二五割を占めているが、大阪市ではゼロである。

更に商人の町・大阪では実利性が尊重され、河川や堀割の河岸は植樹用地としてよりも舟着場、荷揚場などに高度に利用されていたことも、緑の少ない理由の一つとなった。

以上のような基本的要因を踏まえ、大

*樹被率=総面積に対する樹木で覆われた面積の割合



大阪緑地軸構想図

- 台地軸(主軸)
 - 河川軸(主軸)
 - 幹線道路軸(副軸)
 - 高速道路軸(副軸)
 - 掘削軸(副軸)
 - 公園
- 交通網は概略図で示してあります。



『大阪緑地構想』の基本概念

二、大阪緑地構想

大阪市は、人口二六〇万人を超える、世界有数の商業都市である。しかも、豊臣秀吉による町づくりから数えても、すでに近代都市として四〇〇年の歴史を有している。従って『大阪緑地構想』には、

そうした都市としての規模や性格、そして歴史性などを考慮しつつ、同時に大阪を新しい緑の町へとイメージチェンジさ

土された造成地であり、しかも急激な都市化が進んだ。

②早くから高密度な商都として栄え、緑のための余剰が乏しかった。

③町地が多く、武家地が少なかったため、東京と比較すると庭園など過去からの緑の遺産が少ない。

「イメージ的要因その他」

①現在の大阪における中心地や主要駅の位置と、緑の多い地域とが一致していないため、緑のアピール性に欠ける。(例えば東京では、上野、新宿、渋谷などの近

阪に緑が少ない理由を整理すると、次のようになる。

《地勢的要因》

①大阪の中心部の大半は沖積平野の低湿地にあり、元来、樹木が少なかった。

②水はけの悪さや都市土壌などのため土壌条件が良くなく、樹木が育ちにくい。

③「水の都」の名の通り、緑地の代りに河川や堀割が貴重なオープンスペースとして機能してきた。

《歴史的要因》

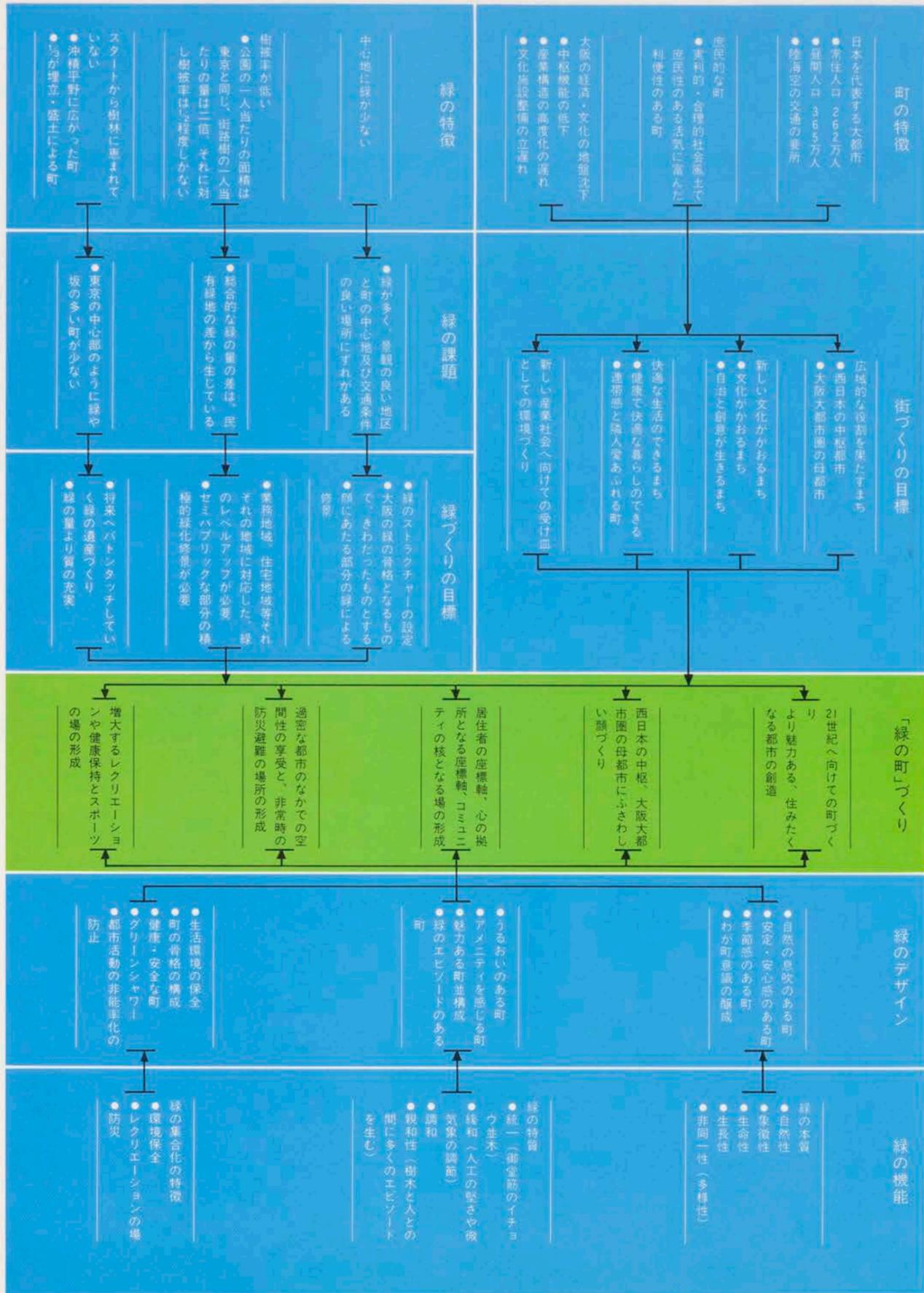
①市域の三分の一は人工的に埋立て、盛

くに、広大な緑地や公園が見られる) ②町に起伏が乏しいため、視覚的に緑が目立ちにくい。その反面、三方を緑の六甲、北摂、生駒の山々で囲まれ、中央部の不足を視覚的に補っていた。

こうした多様な要因が複合的に絡み合っている。今回、大林組プロジェクトチームは、緑が少ない町・大阪の現状となつて

いる。今回、大林組プロジェクトチームは、緑化、植生、都市計画など多角的な見地から、これら要因を検討し、『大阪緑地構想』の出発点とした。

『大阪緑地構想』の考え方



せる、総合的な視点が不可欠のものといえる。

そこで大林組プロジェクトチームは、構想の基本的な考え方を次のように設定した。

●緑の一般的機能を重視した計画である

すでに示したように、世界の先進国諸都市では一人当たりの公園面積も広く、都市における緑の効用を重視した計画が立てられている。

緑の機能としては、グリーンコンタクト機能、環境保全・保健休養機能、防塵・防音機能、温度・湿度調節機能、酸素収支の安定保持機能、美化・修景機能などを始めとして、多岐に及んでいる。いずれも人間が都市生活を快適に過ごすための不可欠な要素だが、とりわけ過密化する現在の都心部においては、生きた自然が人間にもたらす精神的効用を見逃すことはできない。生きた自然こそ、人間と自然との貴重な根源的関係を回復するものであり、人間が自然と共存していくことの意味を、如実に物語る存在だからである。

世界各国の大都市が、早くから都心部の緑地や公園を保護、整備してきた理由も、そこにある。大阪における緑化を考えるに際しても、こうしたさまざまな緑の機能を十分に考慮した上で、計画の立案を行うことが大切である。

●大阪の緑の特性をいかした計画である

大阪は町人の都市として発展する中で、独自の庶民文化を育ててきた。「緑の少ない町」とはいえ、上町台地やその周辺に

は庶民の遊び場としての緑が、まったく無かったわけではない。江戸時代の『浪花百景図』には、桜之宮、萩の茶屋、桃ヶ池などの花の名所が描かれ、桜の生国魂神社、梅の夕陽丘とともに、物見遊山の場所となっていたことが知られる。これらの多くは、都市化につれて姿を消したが、現在でも地名にその名残を留めている。

また町人たちは知恵を働かせ、小規模ながらも緑と接する場も創造している。例えば、町家には通り庭があり、茶室がつくられ、そして坪庭という関西独特の内庭を発達させた。坪庭は、敷地いっばいに建設された町家の中の小さな緑の空間に過ぎないが、やがて茶の湯の大衆化に伴い茶庭風坪庭として結実した。

こうした町人文化の成果である坪庭などを積極的に採用し、構想全体に大阪らしい緑の特性をいかすこととした。

●民有地緑化・官民一体の緑化・住民参加の緑化の推進

公共的な緑化が、最近ある程度の進展を見せているのに対し、立ち遅れているのは民有地の緑化である。特に大阪はその傾向が強く、全体的な緑化計画にも影響を与えている。そこで民有地の、特に目立ちやすいセミパブリックな部分の緑化を重視し、それぞれの地域にふさわしい緑化手法を採り入れた。

また、大阪のような大都市のイメージチェンジを図るには、公共、民間の連携による街づくりの視点に立った総合的な緑化が必要である。構想全体のアウトラインを決定する公共的な緑化と、町の隅隅までをフォローする民有地の緑化との

相乗効果による緑のデザインを考慮した。更に、都市の緑化は、単に緑の量を増やすばかりでなく、それが地域住民に愛され、なじみやすいものとなることが大切である。そこで緑化の考え方の中に、町内行事などを盛り込み、町の緑を住民の生活の中に生かしていくための提案を行った。

●二十一世紀への緑の遺産づくり

現在の大阪は、前述したように、庭園など過去の緑の遺産が少ない町である。都市としての成立過程から見ても、かつてはやむを得ない面もあったが、今後、大阪が緑濃い町へと生まれ変わるには、やはり遺産と呼べるにふさわしい緑の創造を行っていく必要がある。現在の住民たちから愛されると同時に、子の代、孫の代の人々が守り育てていこうと思える、質の高い緑、あるいはシンボリックな緑こそ、二十一世紀の大阪のイメージを代表するものといえる。

『大阪緑地構想』の展開

(一)グリーンストラクチャー(緑軸)の設定

●主軸

大阪の町に、緑の息吹と自然の秩序を与える骨組みとして、グリーンストラクチャー(緑軸)を設定する。これは主軸と副軸から形成され、主軸は台地軸と河川軸とからなる。大阪の町を、緑と水の巨大なリンク(環)により包み込み、「大阪緑地構想」の骨格を成すものであり、自然性と歴史性を兼ね備えたエリアでもある。

a、台地軸

大阪市の背骨ともいえる上町台地は、

市の緑化計画では緑を中心とした景観整備地区に位置付けられている。今回の構想では、この大阪市案を基本として発展させた。

上町台地は歴史、文化、自然のあらゆる面から見て、緑地構想全体の主軸に最もふさわしい地域である。北から桜宮公園、大阪城公園、高津宮、生国魂神社、四天王寺、天王寺公園、帝塚山、住吉公園を経て大和川へと至る軸で、南北約一、二キロの細長い台地を形成している。特に夕陽丘の斜面の緑は、市内に残る唯一の自然状態に近いものであり、これらの積極的な保全と、上町台地全域の緑の整備によって、『大阪緑地構想』の主軸とするものである。

この地域はまた、大阪市の東西の接点でもある。現在、分断されている東西を結ぶ緑の帯として機能させるため、軸上に文化施設などの建設を図りたい。

b、河川軸

●水の都 大阪市内を流れる代表的河川のいくつかを結び、その沿岸域を緑化し、緑と水の有機的な連結により、主軸の一つとなるものである。北の大川から、堂島川・土佐堀川にはさまれた中之島付近までは、すでに大阪市の計画案に従って中之島公園及び遊歩道として整備されつつある。そこでわれわれプロジェクトチームは、この計画案を更に延長し、木津川を南下し、大和川へと続く河川軸を計画した。これによって緑の帯は、大阪の都心部に巨大な「緑の環」を形成することとなる。

木津川は現在、港湾部における工業地域としての役割が主体となっている。こ

これを緑化のための河川軸に設定し、既存の千島公園内にある昭和山なども取り込む形で整備することにより、災害時の避難用緑道及びパツファー(緩衝帯)としての新しい機能を生み出すことができる。将来は、大阪湾岸の整備により緑の臨海軸を構成し、大阪の代表的河川である淀川の河川軸と結び、更に大規模な主軸の環が可能となる。

〈副軸〉

上町台地の台地軸、旧淀川・木津川・大和川などによる河川軸を主軸とすれば、その両者を結ぶ幹線道路及び堀割が副軸である。

a、道路軸

(幹線道路軸)

ここでいう幹線道路とは、谷町筋、松屋町筋、堺筋、御堂筋、四ツ橋筋、なにわ筋、国道一、二号線、土佐堀通り、中央大通り、長堀通り、千日前通りであり、これらによって大阪の中心部に「緑のメッシュ」を形成する。御堂筋のように、すでに銀杏並木が全国的に有名な道路もあるが、大阪の繁華街を貫く幹線道路全体に、緑のグレードアップを図るための緑軸である。

(高速道路軸)

高速道路周辺にも重点的な緑化を実施する。従来から大阪は、大阪国際空港などから高速道路を利用して市内に入る場合、視覚的な緑の乏しさが指摘されてきた。本構想では、こうした視覚に訴える緑の印象についても配慮し、高速道路周辺地域の緑化を図ることとした。具体的な手法としては、周辺ビルの屋



地蔵盆(写真/百々俊二)

老人はじめ一般住民の利用機会は増すに違いない。緑の持つさまざまな機能は、身近で実際の現場でこそ、大きな効果をもたらすのである。

(三)民有地緑化

基本概念の章でも述べた通り、大阪では民有地緑化の大きな立ち遅れが目立っている。民有地の緑は、本来、個人の楽しみや、建物単体の修景などに機能する

上、ベランダを利用した緑化などが考えられる。

b、堀割軸

現在の大阪に残る数少ない堀である東横堀川・道頓堀川については、堀割軸として緑化を推進する。堀割軸をふくめた緑の河川軸は、かつての「水の都」大阪の歴史性と雰囲気、現代に伝えるものとなるであろう。

(二)コミュニティと緑

大阪市内は平坦地が多いため、公園は特色がなく、大半がスポーツ広場や遊具を主体とした、西欧的で単一なデザインのものが多い。そのため一般の人々にとってはなじみにくい。

そこで、庶民性豊かな大阪の風土にあった公園へと新たな機能を付加し、公園を改造していく必要がある。

大阪には、コミュニティの伝統に根ざした行事や祭りが、現在でも残っている。行事や祭りの場を、町内の緑地や公園に設定することによって、緑のある空間を住民生活と結びつけることができる。例えば、関西独特の行事に「地蔵盆」がある。町内のお守りである地蔵の周辺に緑地や公園を整備し、「地蔵盆」の行事をそこで行うことも考えられよう。

また前述したように関西独特の緑の文化遺産である坪庭を、新しい緑のコミュニティの核として提案する。元来はプライベートな内的空間であった坪庭だが、これを公園のデザインに取り入れ、大阪らしい緑の特性をアピールする試みである。町内の緑地や公園の中に、関西の文化である「坪庭」や茶室を造ることにより、

ものだが、大阪全体の緑化を行う上で、町の緑としての役割を重視した。とりわけ、第三者の目にもとまる堀、外壁、広場などは、緑化のための貴重な空間といえる。

また、第一種住宅専用地域のない大阪市内では、今後ますます高層化、ビル化が進む中で、民有緑地はより少なくなることが推察される。この事態を好転させるためには、高層化、ビル化と緑の問題をあらかじめ計画的に適合させていくことが重要である。とりわけ都心部においては、小さな空間も上手に利用し、大阪に緑のイメージを創造する綿密な演出が必要となる。

そこで本構想では、次のような民有地緑化のさまざまな手法を取り入れた。

●住宅地緑化

- ・堀の生垣化及びセットバックによる空地の緑化
- ・民有空地の公園緑化利用(公開緑地)



坪庭(写真/岩宮武二)

●大阪の緑の構成

性格づけ	イメージ	位置	要求される機能	計画概要	デザイン	
ストラクチャーとしての緑	緑の都市軸(主軸) 大阪の背骨として市民の座標軸となるもの	上町台地 旧淀川	上町筋を含む)木津川-大和川	マスとしてのボリューム感、連続性、故郷性、大阪らしさ	過去からの緑の遺産をよりグレードアップして、将来へバトンタッチしていく。 上町台地—寺院のオープンスペースが駐車場化、マンション化しつつあり、早急な総合的整備を行う。 旧淀川—木津川—水辺の整備をよりボリュームアップ(親水空間の拡大など)する。	上町台地には特に、歴史や市民生活と結びついた緑をふやす。旧淀川、木津川一帯は、水の都・大阪を表現するのに最適な場所であり、大阪らしさを醸成する。
		副軸	谷町筋、国道1・2号線、堺筋、土佐堀通り、四ツ橋筋、長堀通り、なにわ筋、千日前通り	連続性、季節感、演出性、装飾性、建物との調和、統一感、通りの個性	主軸を背骨とすれば、肋骨にあたる部分。町全体に個性と統一感を与え、ソフトな印象をもたらす。電(話)線を地下埋設、又は裏道へ移設するなど、街路樹を生かす工夫を行う。	緑の回廊となるようなデザイン計画を進め、樹木剪定も控えめにし、電柱を目立たなくする。看板などの整備を行い、町に緑の印象を濃くし、足元には花のつく灌木帯をつくる。
		軸	阪神(空港線、環状線)	景観性、車のスピードに対応したデザイン	空港や他都市から大阪の中心部へ入るアプローチ道であり、神社にいれば、緑濃い参道の雰囲気醸成する。	高速道路周辺の建物のベランダや屋上を、緑や花で美化・修景し、大阪への訪問客を温かく迎えると共に、市民につろぎを与える。
		堀割軸	東横堀川、道頓堀川	歴史性、親水性、空間性、生物との共存(魚)	水の都・大阪の歴史を伝える部分で、埋立てをまぬがれた唯2カ所の貴重な堀をいかに。	東横堀川には高速道路が走っており、構造物に負けない緑の帯をつくる。
河川軸	淀川、大和川	自然性、開放性、生態系、生物治水	大阪市の地勢的境界(エッジ)となっており、市の枠組となる部分。	現在の河川敷公園の植栽に加えて、堤防部分にも緑を施し、全体の質をアップしていく。		
		臨海軸	南港、北港を中心とした周辺の臨海部	海と大阪のかかわりあいを示すもの…歴史性	埋立て地でしか確保できない大規模なスポーツ公園や、海をテーマとした公園をレイアウトする。	
顔としての緑	駅前広場 市民公園	大阪中	美しい華やかさ、都会性、非日常性、ロマン	都市の玄関。人間でいえば顔にあたり、良好な雰囲気(イメージ)をつくる。	若者たちの待ち合わせ場所となるような、華やかで都会的な広場づくり。	
シンボルとしての緑	グリーンマス(鎮守の森)	大阪大	象徴性、中心性	大阪の自然の核となる部分。緑濃い森、鳥や虫の生息するエリアづくりを行う。上町台地の昔の雰囲気を再現する。	大木を主とした森林公園づくり。緑の微妙なアンジュレーションと、水の都らしい流れる水により構成する。	
拠点としての緑	都市基幹公園 地区公園	長居、鶴見緑地、城また新設の都市基幹公園、地区公園(4ha以上)	多様性、地域性、空間性	大阪は平坦地が多く、アクセントに欠ける。一方、水はけが悪く樹木の生育が良くないため、大規模公園は盛土して地形に変化をつけると共に、土壌の改良も図る。	緑(公園、緑地)の個性化と、全体的な統一性を図って、植栽も単調にせず、パターン、密度、樹高、葉色、種類などコントラストをつける。	
コミュニティの核としての緑	近隣公園 児童公園	南天満、都島、中大堂染等 また新設の近隣、児童公園(2ha以下)	季節感、話題性、コミュニティの育成、親密性	公園の量を増すと共に、各公園に特色をもたせ、更に、公園相互のリエーションを考慮する。	地域のコミュニティの中心として、利用度の高いものとする。小規模でも、子どもから老人までが活用できると共に、関西らしさを盛り込む。	
建物の外部空間としての緑	公共施設の外部空間	官公庁、公民館、図書館、郵便局等	建物との調和、統一感、演出性	公園、街路樹の緑を補う、貴重な緑部分。公共施設の外部空間の積極的活用を進める。	市の木や花の植栽による特色づけ。また、シンボルツリーにより演出性を高める。	
日常のディテールを構成する緑	民有緑地	住居施設(戸建、集合住宅)、商業施設、業務施設、工業施設等	生活感、アメニティ、プライバシー・アイデンティティ	緑に対する認識と緑の絶対量をアップする重要な部分、ビル、マンション、住宅等の緑の質を上げる。	個人の緑から、自分たちの町を構成する緑へと、意識を高める形のデザインを進める。	

- ・集合住宅の駐車場やバルコニーの緑化
- ・住民の手による記念植樹及び果樹園、菜園、花壇などの設置
- ・貸農園、コミュニティ農園、市民園芸村などの設置
- ・町の保存樹の指定やシンボルツリーの設定
- ・モデル緑化地区指定や緑化協定の締結
- 商業・業務地区
- ・ビルの屋上庭園
- ・歩道の拡張と街路樹の植栽、道路の広場化
- ・総合設計制度の導入による広場や緑地歩道(ポケットパーク、グリーンモールなど)の確保
- ・サンクンガーデンの設置
- ・デッキによる広場や緑地の確保
- ・ウインターガーデンの設置
- ・壁面やバルコニーの緑化修景
- ・オフィスランドスケープ及びビウインドーガーデンの設置

- ・シヨッピングモールやプラザの緑化
- ・コンテナガーデンの設置
- 工業地区
- ・大規模なエコロジー緑化
- ・緩衝緑地帯の設定
- ・インダストリアルパーク化及び工場緑化

以上、民有地緑化の手法の一部であるが、その他、緑化への関心を高める方法として、緑化基金の設置や緑化フェア、コンクールなどの開催も考慮したい。きめ細かい緑化計画こそ、二十一世紀の大阪に「市民の緑」を生み出す機会となるものである。

大阪の緑化は、以上のように緑が有機的、システムの的に結ばれることによって機能を十分に発揮する。また緑の配植は、ランドマーク的な点的で単層なものから、街路樹の線的な緑や森のような面的で多層なものまであるため、計画地の環境に対応した緑の秩序性が必要である。

長堀通り「緑の町」計画

都市緑化のモデル・プランとして



「都市としての緑」ゾーン想定図(御堂筋から東方向を望む)

「林としての緑」ゾーン



「庭園としての緑」ゾーン



現在の長堀通り(心斎橋から東方向を望む)



「緑の町」ゾーン想定図

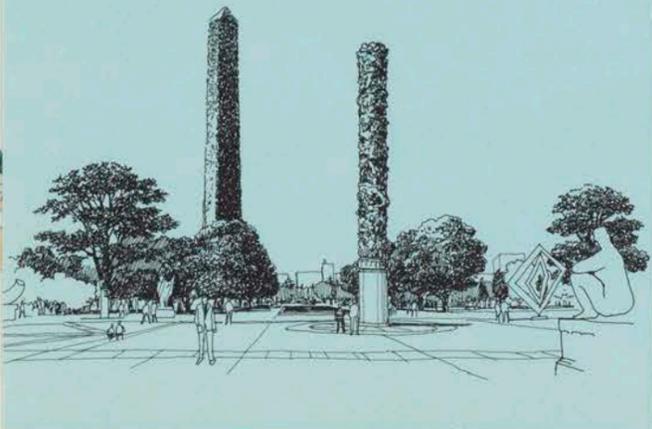
「田園としての緑」ゾーン



「世界の緑」ゾーン



「文化・教育としての緑」ゾーン



『緑の町』計画の位置付け

大阪市の中央部を東西に横切る幹線道路の一つに、長堀通りがある。かつてはその名が示す通り、水を湛えた堀割であり、市内と木津川とを結ぶ水運の要路であった。現在の長堀通りは、デパート、商店、オフィスの立ち並ぶ町並みを貫き、繁華街の心斎橋付近において御堂筋と交差する、大阪市民にはなじみ深い道路となっている。

また長堀通りは、前章の『大阪緑地構想』の中で、副軸(道路軸)の一本に設定したように、台地軸(上町台地)と河川軸(木津川)という主軸二本を結ぶ存在であり、大阪緑化の上で極めて重要な位置を占めている。そこで今回、大林組プロジェクトチームは、この長堀通りに着目し、都市緑化の未来プランの立案に挑戦した。

現在、同地では都市再開発プランが検討されつつある。だが、『緑の町』計画では、あくまでも将来における緑化を主体としたモデル地域として長堀通りを設定し、緑の遺産の少ない大阪に二十一世紀へと継承できる夢のグリーン・スペースの創造をめざして、計画を推進した。同時に、本計画を、各地の都市緑化のモデルプランとしても提案するものである。

計画の概要

今回、緑化計画のために設定した長堀通りの範囲は、東は上町台地への昇り口に当たる松屋町筋から、堺筋、三休橋筋、御堂筋、四ツ橋筋、なにわ筋を経て、木

津川を越えて松島公園へと至る地域である。東西約三〇〇m、幅員五〇〜六四m、面積約一四〇〇㎡。松島公園周辺も含めた面積では、約一九〇〇㎡となる。

現在、長堀通りは主として車道及び駐車スペースとして利用されているが、本計画ではそれらは地下施設へと移し、地上部の全域をグリーン・スペースとして確保した。ちなみにこれは、甲子園球場五分分に匹敵する規模の緑地となる。大阪の町の中央部にこれほど大規模な緑を創造することにより、都市生活に自然の息吹を注ぎ、アメニティを増加させ、町全体に緑のイメージを広げることが期待できる。またそれは、貴重な都市空間の多層利用の一環でもある。

地上部分の基本デザインとしては、山や谷の変化をイメージさせるため、微妙なアンジュレーションを土地全体に施した。また、長堀通りをかつて流れていた堀割の水を再現し、全体に一貫して水の空間を設けた。道路との交差点付近は土盛り、グリーン・スペースと道路を立体交差させる方法により、各エリアの移動をスムーズに行えるよう配慮した。

土壌については、全体に客土及び土壌改良を施すこととした。客土はマサ土にバーク堆肥(二五〜二〇%)、パーライト(二五〜一〇%)を加える。土壌改良は、土壌試験に基づき適切な処置を実施する。また散水については、中水を利用し、コンピュータによる地中湿度の自動測定に従って自動的にスプリンクラーから散水を行い、同時にデータも蓄積する。なお地下部分には、断面図に示した通

り、往復四車線の車道、現在構想中のミニ地下鉄及び、各種公共設備用の共同溝を設置することとした。

各ゾーンの計画内容

長堀通りをモデルとしたグリーン・スペースの具体的デザインを行うに当たっては、緑の副軸にふさわしく、季節感、演出性、装飾性、国際性、連続性、そして街路の個性などを重視した。また、緑と土地、人間、及び世界との結びつきをテーマとして、緑の代表的なイメージをピックアップし、それを六ゾーンに表現した。

- ① 林としての緑——大阪周辺のなじみ深い樹木により林の風景を構成する。
- ② 都市としての緑——都市の中での先端的空間と緑の出会いを演出し、同時に水空間(堀)を再生する。
- ③ 庭園としての緑——町における自然の取り入れ方を代表するものとして、世界の主要な庭園様式を再現する。
- ④ 田園としての緑——牧歌的田園風景をお花畑など明るく開放的な緑の空間を創造する。
- ⑤ 世界の緑——世界各地の特色ある植物を網羅し、生態観察もできる森をつくる。
- ⑥ 文化・教育としての緑——世界のグリーン・インフォメーションの紹介や植物教育園の設置などにより、緑の文化エリアを構成する。(詳細は表を参照)

今までにない都市の緑のイメージが、大阪に誕生することになるだろう。それは『緑の博覧会』ともいべき景観であり、二十一世紀には、都市が緑によって文化的、社会的役割を果たす時代が到来するかも知れない。

なお、長堀通り「緑の町」計画に要する工費見積りは、次の通りである。

六〇億円
造園工事費
(造成・土壌改良及び排水工事、植栽、広場、修景工事などを含む)
建築関係工事費 一四〇億円
(サイロ、民家、四阿などの建築及びクリスタルドーム、グリーンタワー、緑研究センターなどの工事を含む)
地下関係工事費 六九〇億円
(道路用シールド二本、ミニ地下鉄、地下駐車場を含む)

●総計 八九〇億円

作業を終えて

世界の大都市でも海と山が近接している都市は数少ないといわれている。その点、大阪は位置的に恵まれてはいるが、心理的には海も山も遠く、自然も少ない。しかし、この二、三年大阪の緑は街路整備に伴い、目に見えて増加した印象が強い。また上町台地の緑の濃い夕陽ヶ丘付近を散策すると、大阪の一つの側面を再発見できる。

今回の構想を通じ、多くの方々に大阪の町と緑に関心を持っていただき、大阪緑化の推進力となれば幸いである。

1. 林としての緑

ゲート及び大阪周辺の林の風景一緑の名所を表現した。土地に起伏をつけ山と谷と溝及び流れによって景観をつくる。

主要施設	主要植物
ゲート	「緑の町」の東端に位置し、緑地の出発点の景観を醸成。松屋町筋に大阪の代表的なクスの大木を植栽する。さらに阪神高速道路の周辺には世界的な大木の一つであるセンペルセコイアの巨木を植栽。高速道路の整さを和らげるとともに、東端のアクセントとした。
松林	関西の代表的な緑の風景松林を表現。
竹林	丘陵地に広く分布している竹林と竹林の中の散策道。
鎮守の森	常緑樹の高木を代表とする。多層な構成の緑。
紅葉谷	渓谷をつくり水にはえる関西にも多い紅葉の名所を計画地につくる。
雑木林	大阪周辺のクスギ、コナラ、クマザサササ等による地域植物も植栽。

2. 都市としての緑

都市における緑のあり方の一つとして、先進的技術と空間で、また四季を通じて楽しめる世界の緑を創造するとともに、過去からの大阪の面影をとどめる。場及び心奮起を再現する。

主要施設	主要植物
クリスタル	クリスタルなドームに覆われた大小の空間。世界中の植物を収容。展示する緑の博物館。光ファイバーによって光の調整。供給をおこなう。また冬季においても快適に緑を楽しむ観覧できる空間。温室、冷室、暗室を完備。
堀(水)	以前の堀を再現し、堀を流し、都市の騒音を消すとともに水の変化を楽しむことができる。水上にイベント空間のステージを設置し緑の大バーゴラの下で音楽会等を開催できる。
水の広場	周辺のショッピングにやってくる人が集まり、また散策していく出会いの場。心奮起を再現する。
クリスタル	最も入った展望エスカレーター、昇降機に際して、「緑の町」の景観を楽しむことができる。

3. 庭園としての緑

都市生活の中で、緑のとり入れ方の一つとしての庭園をテーマとしてとりあげた。風土、国民性の違いによる庭園様式のコントラストが興味ある。

主要施設	主要植物
フランス庭園	フランス幾何学式庭園、噴水池、花壇、芝生、模造花壇、彫刻、高き、通道路の高架の下及び前面を利用して庭園を設置。
イタリア庭園	イタリア露壇式庭園、カスケード、グッケイジュ、プラタナ、噴水、壁泉、彫像、彫柱、水鏡、階段、池泉。
イギリス庭園	イギリス風景式庭園、小川、芝生、シダレヤナギ、ボブラ、土地の微妙なアンジュレーション、水車小屋、自然園路。
日本庭園	池泉回遊式庭園、西阿、池、中ノ、マツ、モッコク、ツバキ、島、雨滝。

4. 田園としての緑

心の故郷的な景観構成。花の咲き乱れる、牧歌的田園風景。

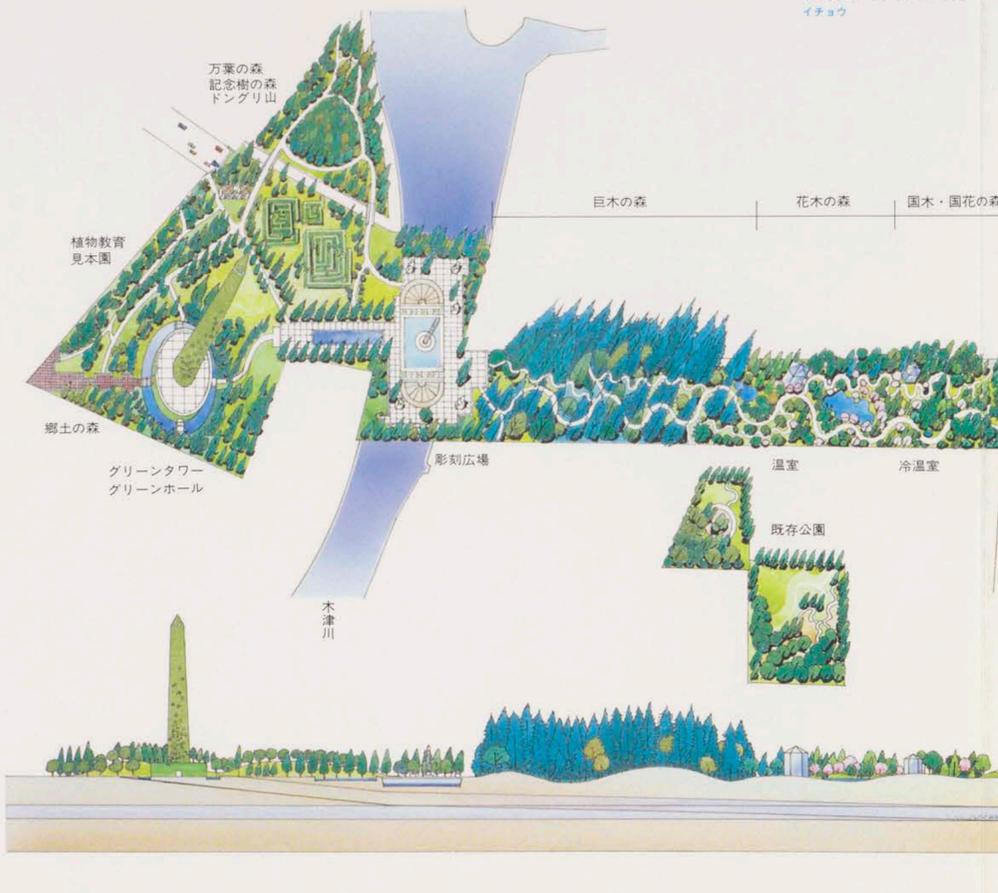
主要施設	主要植物
花園	お花畑の中に小橋を計画。緑廊(パーゴラ)を渡りながら楽しむことができる。
果樹園	代表的な果樹を植栽。色とりどりの実実を見学できる。
牧場	家畜園的なもので牛・馬・ヒツジ等を飼育、サイロも設置。
水生植物園	水生植物をハッ橋を渡りながら見学できる空間。



6. 文化・教育としての緑

グリーンインフォメーションセンターや緑の図書館等世界の緑の情報の収集、発信基地。また住民参加の緑づくりや楽しく遊べる緑を集積したゾーン

主要施設 (主要植物)	
彫刻広場	水上のデッキの上の彫刻広場
記念樹の森	記念日に各自が好きな樹木を選び植栽するゾーン。
ドンダリ	山や公園から採集してきたドンダリから育てる森。アラカシ、シラカシ、スダジイ、マテハンイ
万葉の森	万葉の植物を集めた森。アシビ、イチイガシ、ワメ、キキョウ、カタクリ
郷土の森	大阪の各市の木を植栽。クス、イチヨウ、モミジ、マツ
植物教育	植物の生態教育園。アラカシ、スダジイ、アオキ、シロダモ見本園
ラビリンス	樹木による迷路園
町家の坪庭	関西の町家の坪庭を再現
グリーン	ワールドグリーンインフォメーションセンター、植物化石室、植物標本タワー
家・植物図書館	グリーンタワー外壁はあらかじめ植栽されたツタにより緑で覆われている。展望台から「緑の町」を一望できる。



5. 世界の緑

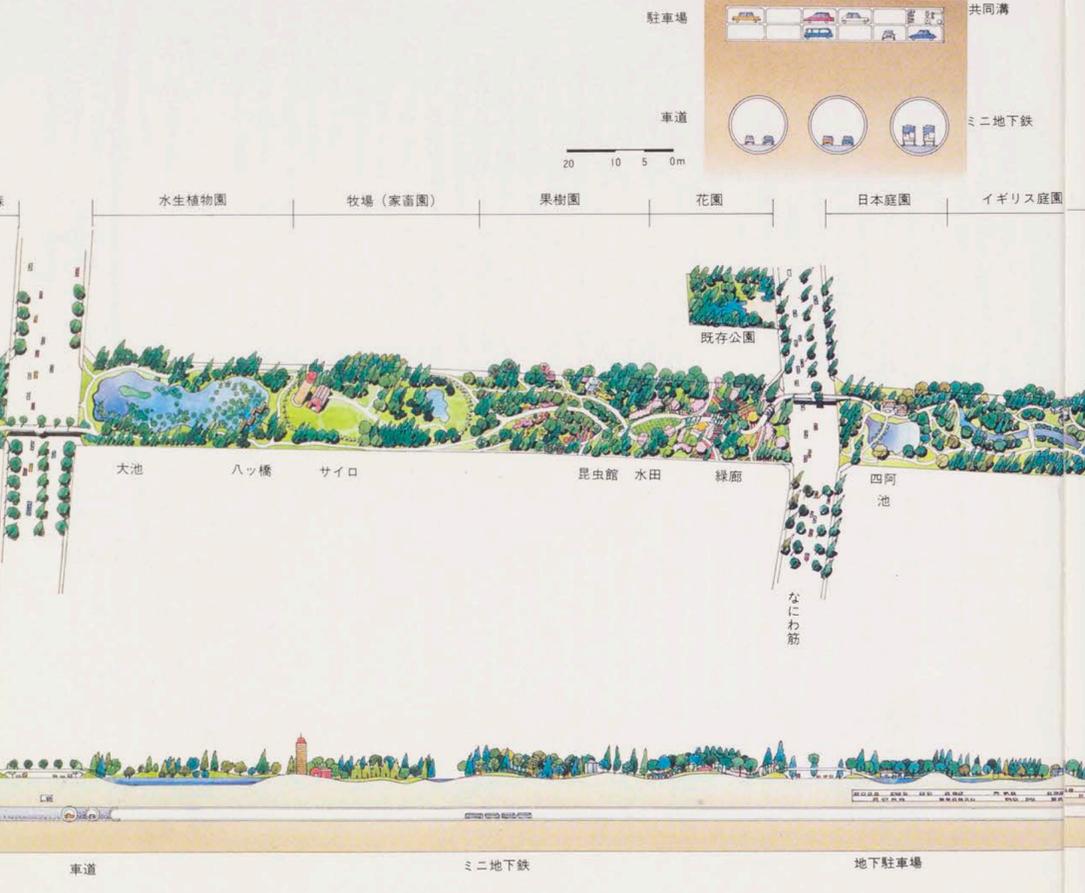
世界の緑のうち、特色ある植物を3つのゾーンに植栽。

主要施設	主要植物
国花の森	イギリス(バラ)・韓国(ムクゲ)・フランス(ヒマワリ)・タイ(スイレン)・中華民国(ホトトギス)・デンマーク(アカツメクサ)・西ドイツ(ヤグルマギク)・日本(ヤマザクラ)・ブラジル(カトレア)・フランス(アイリス)
花木の森	世界中の花の美しい木や紅葉の美しい木の森
巨木の森	多数の巨木を植栽

5. 世界の緑 (continued)

世界の緑のうち、特色ある植物を3つのゾーンに植栽。

主要施設	主要植物
花木の森	世界中の花の美しい木や紅葉の美しい木の森
巨木の森	多数の巨木を植栽



2. 都市としての緑 (continued)

都市における緑のあり方の一つとして、先進的技術と空間で、また四季を通じて楽しめる世界の緑を創造するとともに、過去からの大阪の面影をとどめる。場及び心奮起を再現する。

主要施設	主要植物
クリスタル	クリスタルなドームに覆われた大小の空間。世界中の植物を収容。展示する緑の博物館。光ファイバーによって光の調整。供給をおこなう。また冬季においても快適に緑を楽しむ観覧できる空間。温室、冷室、暗室を完備。
堀(水)	以前の堀を再現し、堀を流し、都市の騒音を消すとともに水の変化を楽しむことができる。水上にイベント空間のステージを設置し緑の大バーゴラの下で音楽会等を開催できる。
水の広場	周辺のショッピングにやってくる人が集まり、また散策していく出会いの場。心奮起を再現する。
クリスタル	最も入った展望エスカレーター、昇降機に際して、「緑の町」の景観を楽しむことができる。

3. 庭園としての緑 (continued)

都市生活の中で、緑のとり入れ方の一つとしての庭園をテーマとしてとりあげた。風土、国民性の違いによる庭園様式のコントラストが興味ある。

主要施設	主要植物
フランス庭園	フランス幾何学式庭園、噴水池、花壇、芝生、模造花壇、彫刻、高き、通道路の高架の下及び前面を利用して庭園を設置。
イタリア庭園	イタリア露壇式庭園、カスケード、グッケイジュ、プラタナ、噴水、壁泉、彫像、彫柱、水鏡、階段、池泉。
イギリス庭園	イギリス風景式庭園、小川、芝生、シダレヤナギ、ボブラ、土地の微妙なアンジュレーション、水車小屋、自然園路。
日本庭園	池泉回遊式庭園、西阿、池、中ノ、マツ、モッコク、ツバキ、島、雨滝。

